

大学受験のために高校時代に使い込んだ単語集を1冊用意する。過去に使い込んだものがあればそれが好ましい。

現在使用している問題集で長文読解やリスニング問題を解いているときに、見覚えはあるが意味が分からない単語が出てきたら、手持ちの単語集の索引を見て、同じ単語がないか確認する。もしも出てきたらその単語が含まれる例文を数回音読して、単語がどのように使われているかを確認する。このことで、同じ単語であっても違う使われ方がされていることに注意が向く。またその単語をリストかカードに書きとめることで、単語単体ではなく例文を含めた単語のイメージがインプットされる。自分で作成した単語リストを見た際に例文も頭に思い浮かべるよう心がける。

実際に学習法を実践した学生は「単語が覚えやすくなった」「英単語が読めるようになることで、忘れにくく記憶に残りやすくなる」などとコメントしている。その一方で Shadowing が上手にできない不満や、今までの学習法から脱却することへの不安の声もあるので、今後の課題として検討していきたい。

## D.H.ロレンスの動物の描写 について (その3)

経営学部  
山田 晶子

前号に引き続き今回も、ロレンスの作品に登場する動物と主題を関連させてその作品を紹介しようと思う。今回は雄鶏 (cock) を取り上げる。

1928年に雑誌『フォーラム』(Forum) に掲載された中編『逃げた雄鶏』(The Escaped Cock) は、ロレンスの死後の翌年の1931年に本として出版されたときは題名が『死んだ男』(The Man Who

Died) に変更されたが、ロレンス自身は『逃げた雄鶏』という題名の方を気に入っていたということである。現在では一般に『死んだ男』という題名で通っている。このように題名に表われている「雄鶏」と「死んだ男」は作品の主題と密接に関わっている。

この作品の舞台背景はエルサレムであり、時代はイエス・キリストが処刑された直後である。死んだ男と言う人物は一度も名前が書かれていないのであるが、文脈からイエス・キリストを指していることが分かる。小説は第1部と第2部に分かれており、第1部で百姓夫婦が飼っている雄鶏が登場する。この雄鶏は夫婦が飼っている他の家畜の雌鳥やロバとは異なって生命力に溢れている。夫婦は雄鶏が逃げないようにと、その片足を紐で繋いでいる。一方死んだ男は処刑されたのだが十字架から降ろされて経帷子に包まれて安置されていたところ、誰にも知られずに蘇ってフラフラしながら百姓夫婦の家にたどり着き、そこで匿われることになった。彼は、雄鶏が一度百姓の家から逃げ出したときに挙げた鬨の聲に刺激を受けて蘇ったのであった。このように、死んだ男の蘇りに雄鶏は大きく関わっているのである。だが単に生き返ったというだけではロレンスの主題は十分に描ききれない。いったん逃げた雄鶏はまた百姓に捕まえられ、匿われている男と一緒に敷地にいることになる。

空は青く周囲には緑が溢れている。そして雄鶏は同様に色鮮やかでオレンジ色と黒色の羽毛が生えており、鶏冠は赤くていかにも生命力豊かという印象を与えている。雄鶏はいくら縛られても大胆に外の未知の世界に向かって挑戦の雄叫びを上げて、雌鳥に跳びかかる。一方ロバは愚かでどんちょうである。この雄鶏とロバという2種類の動物の対立する性質は、死んだ(そして蘇った)男と他の人間に喩えられている。死んだ男の色は白色である。白色は彼がこの世に蘇って他の人間とは全く異質になっていること、つまり彼が浄化された色として表現されていると思われる。

雄鶏が、縛られていても憤慨と挑戦の気持ちを失わず、「彼(雄鶏)の生命は気味が悪いほどに砕けなかった」と書かれているのと同じく、死んだ男も強い生命力を持っている。彼は、意志に反

して蘇えた今、「幻滅によるむかつき」を何度も味わう。しかし雄鷄の中にうねる生命の波を見ているうちに、新生への決意は固まっていくのである。その新生とは、ロレンスが求める理想の形になるはずのものである。つまり、それは他者との均衡のある生活であり、他者への干渉や強要のない生活、受け取りすぎたり与えすぎたりという過多のない生活である。そしてそのような生活は、「死ぬ」という経験をするによって可能になるのである。死んだ男は、「死んだ」ということが強調されていて、常に“The man who had died”と書き表されているように、「死ぬ」経験をしたことにより悟りを開いたのである。処刑される前の彼は、ただ与えるだけで受け取ることを知らない人間であって、「言葉」だけの精神的な生活を送っていた。だが今や彼は「死んだ」ことによって自らの限界を知ったのである。その限界とは、自分の領分は自分の皮膚の範囲内であるということである。つまり彼の肉体の強調である。「言葉」というものは、どこまでも飛んでいくおせっかいなブヨなのである。このようにこの作品でも、ロレンスは他の作品と同様に「肉体」の強調をしている。汚れて愚かな口バのような百姓夫婦は「死んだ」ことがないため再生もない。彼らには気品がなくて彼らの買っている雄鷄よりも劣っていると死んだ男には思われる。

旅立ちが出来るほどに傷が癒えた男は、雄鷄をもらって旅に出、途中で雄鷄を自由な世界に放つてやる。雄鷄が自分の王国を手に入れたことは、死んだ男も異教の世界（レバノンの近く）へ行って運命の女（アイシスに仕える巫女）と出会い、愛し合うことの伏線になっている。アイシスの女は、死んだ男と同様に、愚かな奴隷などの周囲の人間とは異質の存在である。第2部の冒頭で、奴隷の子どもたちが料理しようとしていた白い鳩が逃げて飛び去る。この鳩の逃亡が第1部の雄鷄の逃亡に対応していて、アイシスの女の夢が実現することの伏線になっている。

以上に述べてきたように、雄鷄はロレンスの中編『死んだ男』において、重要な意味を持っている動物である。

## ロンドンの第一印象

元 経営学部  
安藤 聡

ロンドンへの玄関口はたいていの場合ヒースロウ空港である。ロンドンの中心部から西におよそ25キロのところにある、世界的に見ても中心となるハブ空港のひとつだ。日本から英国へ向かう場合、よほど特殊な経路を取らない限りこの空港に着陸することになる。ロンドン中心部までは地下鉄ピカディリー・ラインで約40分、バスやタクシーで一時間、あるいは運賃は恐ろしく高いがヒースロウ・エクスプレスでパディントン駅まで15分である。

私が初めてロンドンに行ったのは1990年の夏だった。その頃はまだ、ヒースロウ着でない日本からの航空便もわずかながら残っていた。単に安かったからという理由で私が選んだのはソウル経由の大韓航空便だったが、これはロンドンから南に約40キロのガトウィック空港に着陸した。ガトウィックの方がロンドンへの距離も長いので、空港からの交通費も余計にかかるのだが、今思えばロンドンへの最初の入口としてこの空港を利用できたことは僥倖だったと言える。この後一年もしないうちに、大韓航空やヴァージン・アトランティック航空を含め日本からの主な便はすべてヒースロウ着になったのである。

ヒースロウからロンドンまでの車窓風景は割と単調である。地下鉄やヒースロウ・エクスプレスの場合、初めのうちは地下を走っているが、地上に出ると典型的なロンドン西郊の住宅街が延々と続く。地下鉄の場合は、ロンドンの中心に近づくと再び地下に潜る。バスやタクシーの場合にも、いかにも空港らしい景色が終わると普通の住宅街